学 位 論 文 の 要 旨

所　　属	三重大学大学院医学系研究科 生命医科学専攻　病態修復医学講座	氏　　名	村田　泰洋

主論文の題名

Impact of Histological Response After Neoadjuvant Chemoradiotherapy on Recurrence－Free Survival in UICC-T3 Pancreatic Adenocarcinoma But Not in UICC-T4

主論文の要旨

【目的】

近年、進行膵癌に対する術前化学放射線療法(以下、NCRT)は、その局所制御効果から有用性が示唆されているが、その組織学的効果と患者予後との関係は未だ議論の余地がある。進行膵癌に対するNCRTの組織学的効果が患者予後に影響するかどうかを明らかにする目的で、UICC-T3, T4膵癌に対するNCRTの組織学的効果と予後との関係を検討した。

【方法】

当院でNCRTを施行した後に治癒切除を目指して切除した58例(T3:40例、T4:18例)を対象とした。NCRTの組織学的効果はEvans分類を用いて評価し、grade IIb(腫瘍細胞の51~90%以上が破壊されている)以上をhigh responderとし、grade IIa（腫瘍細胞の10~50%が破壊されている）以下のものをlow responderとした。

【結果】

1. T3ではT4に比べてhigh responderである率が高く有意差を認めた（32.5 vs. 5.6%, p=0.027）。T3では、high responderは13例(R0: 13例)、low responderは27例(R0: 22例、R1: 3例、R2: 2例)であり、R0達成率は87.5%であった。一方、T4では、high responderは1例(R1:1例)のみであり、low responderは17例(R0:5例、R1:11例、R2:1例)で、R0達成率は27.8%であった。

2. T3では無再発生存率（RFS）は、high responderがlow responderに比べて有意に高率であった(3年RFS: 71.3%v.s.13.1%, p=0.0095)。一方、T4では両群間で生存率に有意差を認めなかった。

【結論】

NCRT後に切除を行ったT3症例において、組織学的効果はRFSで有意な予後規定因子であると考えられた。一方、T4症例はT3症例に比べてNCRTの組織学的効果が不良であり、治癒切除に十分に貢献しておらず、T4症例ではさらに有用なNCRTレジメンを探求する必要性があると考えられた。

（注）２，０００字以内にまとめて記入すること。